

第 93 回関西実験動物研究会  
実験動物の感染症：過去～現在～未来

1. 実験動物の微生物感染症

－わが国で認められた実験動物固有及びズーノチックウイルス感染症－  
佐藤 浩(長崎大学先端生命科学研究支援センター)

実験動物の微生物感染症に係る研究発表は、昨今その微生物統御が各生産業者により、あるいは各研究機関により充分に行われているためか、学会等でも研究発表数が減少してきている。たとえば、本研究会における講演会を検索しても、第 77 回(平成 15 年)における「西ナイルウイルスの最新情報」以来途切れているように思える。片や実験動物学会の動向を調べると、やはり直近の昨年の大会(2006 年、第 53 回、神戸大会)において関連演題は数題のみである。他方、20 年前の 1986 年の第 33 回実験動物学会(東京大会)における演題数は 18 題であり、それ以前の 1980 年の第 27 回(浜松大会)でも 20 数題発表されていて、総演題数を考慮すると過去においてはかなりの高率で微生物感染症の研究発表が行われていたこととなる。まさに隔世の感というべきであるが、輸入動物の届出制度のスタートと相俟って、果たして実験動物の微生物感染症は旧聞の一つという範疇になってしまうのであろうか？

翻って、人間を取り巻く環境では、実験動物分野と相反し、微生物感染症、特にズーノチックウイルス感染症が新興・再興感染症としてグローバルな問題となり、常日頃私達の身の回りの話題として事欠かない状況になっている。

実験動物分野においても、新しい免疫不全動物の開発や遺伝子組換え動物の激増など、あらたな局面を迎えており、これまで私達が蓄積してきた知識だけではただちに解決できない感染症の出現が危惧されている。また一方、実験動物の近代的な飼養保管法にフィットした新しい検査法の開発なども望まれている。

演者は、微生物感染症の中でも特にウイルス感染症について、実験動物分野と係わって早や 20 数年間経過した。

このたび、その足跡ともいえるべきお話をする貴重な機会を頂いたので、これまで演者らが進めてきた下記の実験動物固有及び動物由来ウイルス感染症並びにその他の研究内容を網羅的に話題として講演し、その任を果たしたい。

○実験動物固有ウイルス感染症

センダイウイルス  
マウス肺炎ウイルス  
マウス脳脊髄炎ウイルス  
ラットコロナウイルス  
ラットカルジオウイルス  
マウス肝炎ウイルス

○ズーノチックウイルス感染症

ハンタウイルス  
パラインフルエンザ 3 型ウイルス  
サルヘルペス B ウイルス  
リンパ球性脈絡髄膜炎ウイルス

○その他

感染動物実験用安全キャビネットの開発  
オゾンウイルス不活化効果  
感染動物実験安全対策  
遺伝子組換えマウスにおける微生物汚染と検査メニューの検討  
ケージダストによる微生物モニタリング